校訂『永代年号記録』

日比野　晃

はじめに

『永代年号記録』は、岐阜県美濃加茂市加茂野町加茂野の藤吉信次郎氏所蔵のもので、一六〇九（慶長十四）年から一八〇〇（寛政十二）年にわたる約二百年間の、加茂野を中心とする記録である。

この『記録』は、一七九七（寛政九）年に、それまでの記録が虫喰で不明瞭になったので、藤吉奥右衛門が写し替えたものである。

藤吉家は、近世加茂野村において、武田家とともに代々庄屋を勤めてきた家であり、（『論叢』第六号所収、拙稿「近世地方史料拾遺」参照）この『記録』はいわば「庄屋留帳」と云えよう。

なお、『記録』の体裁は、縦二十三・五センチメートル、横十七センチメートルで、八十一丁が藍色の表紙で四つ目綴じされている。

飜刻にあたり、出来るだけ原形をとどめることにつとめたが、読解の便をはかり、次の原則にもとづいて校訂した。

一、適宜に句読点・並列点を付した。

一、変体仮名・合字は通行の平仮名に改めた。但し、固有名詞においては原表現のままとした。

一、漢字は原則として新字体を用い、古字・略字は通行の字体に改めた。

一、誤字と思われるものには、右横に（　）をつけて訂したが、明らかな誤字は、ことわりなく正した。

一、脱字は（　）をつけて補った。

一、虫喰のために解読できない文字は□で示し、推定できるものは、右横に（　）をつけて記した。

一、闕字・平出は、一字あけや改行をしなかった。

一、段落（改行）は大体原形のままにしたが、二行書きのものでも特に意味のないものは一行とした。

一、後に加筆されたと考えられる他筆部分は［　］でくくり、右横上部に（加筆）と記した。

一、なお、右の原則以外、（　）をつけて記されているものは、すべて校訂者が記したものである。

永代年号記録　　藤吉奥右衛門記　（表紙）

此記録、年数相立、虫喰相分リ兼候故、此度
写替候、今年迄百八十九年ニ成
寛政九丁巳正月吉祥日
藤吉奥右衛門
写之

（表紙裏）

年代記

一、美濃　十八郡　高五十八万千五百廿三石ナリ
青野ヶ原
各務野ヶ原
加茂野ヶ原
右三つ野ヲ以、美濃トいふ
加茂野原ニ　蜂屋村
三加茂大明神　太田村
奥院ト申ハ　酒倉村
加茂野村　貴布祢大明神
加茂川と申ハ、何れ川ニ而も、東上へ流レル ナリ
三加茂の水、深田村ニ而落合、木曽川の流レト ナル
是、往昔ヨリ王城之地ヲ移し給ふ地ナリ

一、高弐百五石　加茂野村
野高七石弐斗
当国小野城主佐藤三何(河)守知行所ナリ
上有知トモ申伝也
一、慶長十四己酉極月十七日地押有
大閤(太)　御家臣　太田藤助
主馬代　中構(カ)義兵衛
石見　古橋彦左衛門
村控へ
住吉大明神　境内　東西拾間
同断　南北廿四間
貴布祢大明神　境内　七反分
右二社、公儀神帳之通リ
弁財天
天神　両社共野方ナリ、帳面ニなし
弐つ池　壱ヶ所　堤　長七十間　横六間半
おこ起場　池　壱ヶ所　堤　長拾壱間　横四間半
杁弐本、水口四寸四方
杁壱本、水口四寸四角
さんまい具こ　池　壱ヶ所　右同断

一、同十五庚戌年　九月、京大佛さいこう、秀頼公御建立ナリ
尾州名古屋城築
右兵衛亮様御移リ給ふ後ニ、大納言義直公ト申
奉る、源敬公、是ナリ
右代々御雅名、右兵衛亮様と申也
紀州、大納言頼宜公ハ、御幼名ハ常陸之助様ト申
代々紀州御雅名ナリ
水戸、宰相光国郷ハ、御幼名左左衛門佐様ト申
代々水戸御幼名ナリ

一、同十六辛亥年
一、同十七壬子年
一、同十八癸丑年
一、十九甲寅年　四月十六日、京大佛鐘鋳ルナリ
此鐘之名ニ付、関東大坂軍初リ
一、元和改元乙卯年五月七日、大坂落城
一、同二丙辰年　四月十七日、家康公御他界
奉日光山ニ移シ、東照大権現と号
一、同三丁巳年　地押
柴山長兵衛
岡田将監代　北村庄兵衛
長瀬川七左衛門
一、惣田方拾町七反拾弐歩
高百三拾四石九斗八升壱合

内訳
上田八反九畝廿弐歩　但シ反ニ付　壱石四斗五升
高拾三石〇壱升九合
中田壱町三反四畝拾壱歩　但シ反ニ付　壱石三斗五升弐合三勺
高拾八石壱斗六升九合
下田六町六反五畝廿七歩　但シ反ニ付　壱石弐斗四升八合六勺
高八拾三石壱斗四升四合
下々田壱町八反拾弐歩　但シ反ニ付　壱石壱斗四升五合
高弐拾石六斗五升七合

一、惣畑方七町六反九畝拾八歩
高七拾石壱升九合
内訳
屋敷方八反廿七歩　但シ反ニ付　壱石四升四勺
高八石四斗壱升五合
上畑九反六畝歩　但シ反ニ付　右同断
高九石九斗八升八合
中畑弐町八反八畝拾弐歩　但シ反ニ付　九斗三升五合六勺
高弐拾六石九斗八升三合
下畑弐町三反三畝拾壱歩　但シ反ニ付　八斗三升弐合
高拾九石四斗壱升六合
下々畑七反廿八歩　但シ反ニ付　七斗三升五合五勺
高五石弐斗壱升七合
惣田畑合拾八町四反分
惣高合弐百五石　免弐つ三分

取米四拾七石壱斗五升
田畑百石ニ付、八反九畝弐拾五歩
内　田方七町九反三畝歩余
　　畑方拾町九反拾三歩余
一、野方七石弐斗　役米・夫米共ニ免四つ五分余
取米三石三斗弐升六合四勺
右ハ尾州御直段　定金納
　　不同納　之間ニ而、金納
滝川播磨殿御知行所
是ハ尾州御家中之滝川何某と別レナリ
御菩所、名古屋大勧寺ニ而、尾州の滝川ト御旗本之滝川両家より年回有ナリ
一、同四戊午年
一、同五己未年　尾州領ト成
御代官原田右衛門殿
一、高弐百五石　免弐つ八分
取米五拾七石四斗
御役竹　六束廿本、但シ　廿本詰　三束
　　五拾本詰三束廿本　代銀七匁弐分
一、同六庚申年
一、同七辛酉年
一、同八壬戌年
一、同九癸亥年
中段
一、寛永改元甲子年
一、同二乙丑年
一、同三丙寅年
一、同四丁卯年
一、同五戊辰年
一、同六己巳年
一、同七辛(庚)午年
一、同八辛未年
一、同九壬申年
一、同十癸酉年　二月四日、藤吉又八郎重久死去
法名、春沢慶林居士
一、同十一甲戌年
一、同十二乙亥年
一、同十三丙子年
一、同十四丁丑年
一、同十五戊寅年
一、同十六己卯年　寛永通宝初リ
一、同十七庚辰年　三月十日、岡田将監殿木曽路御伝馬被仰渡候
一、同十八辛巳年
一、同十九壬午年
一、同二十癸未年
一、正保改元甲申年　御代官、今村治郎兵衛殿
一、同二乙酉年　地押、美濃御絵図御改被遊候而、元高弐百五石ヲ壱割六分三厘六毛余縮、百七拾六石壱斗七升ト成
一、田方拾町七反拾弐歩
高百拾五石九斗五升八合
但シ百石ニ付、九町弐反弐畝廿三歩概也
内訳
一、上田八反九畝廿弐歩　但シ反ニ付　壱石弐斗四升六合
高拾壱石壱斗八升壱合
一、中田壱町三反四畝拾壱歩　但シ反ニ付　壱石壱斗六升弐合
高拾五石六斗壱升四合

一、下田六町六反五畝廿七歩　但シ反ニ付　壱石〇七升三合
高七拾壱石四斗五升壱合
一、下々田壱町八反拾弐歩　但シ反ニ付　九斗八升四合
高拾七石七斗五升弐合
一、畑方七町六反九畝拾八歩
高六拾石壱斗七升弐合
但シ百石ニ付、拾弐町七反九畝歩余
内訳
一、屋敷方八反廿七歩　但シ反ニ付　八斗九升四合
高七石弐斗三升弐合
一、上畑九反六畝歩　但シ反ニ付　右同断
高八石五斗八升三合
一、中畑弐町八反八畝拾弐歩　但シ反ニ付　八斗四合
高廿三石壱斗八升八合
一、下畑弐町三反三畝拾壱歩　但シ反ニ付　七斗壱升五合
高拾六石六斗八升六合
一、下々畑七反廿八歩　但シ反ニ付　六斗三升弐合
高四石四斗八升三合
惣田畑合拾八町四反歩　但シならし百石ニ付、拾町四反四畝拾三歩
右ならし反ニ高　田壱石八升三合七勺
畑七斗八升壱合五勺
田面割
高六拾七石弐斗壱升八合

一、六町三反歩　浦田面
高七石八斗七升弐合
一、八反歩程　西田面
高拾弐石弐斗四升八合
一、壱町壱反歩程　西町田面
高廿八石六斗六升
一、弐町五反拾弐歩　前田面
畑方割
高廿八石弐斗八升
一、三町七反七畝七歩
高拾壱石五斗九升四合　（粟・稗・中さし　大豆・小豆）
一、壱町四反四畝六歩
高八石五斗八升三合　（芋　なす・木綿）
一、九反六畝歩
高四石四斗八升三合　（木綿　たばこ・大こん・そば・大角豆）
一、七反廿八歩
高七石弐斗三升弐合　（ゑ　こま）
一、八反廿七歩　居屋敷
一、高百七拾六石壱斗七升　免四つ三分
取米七拾五石七斗五升四合
一、同三丙戌年　同断
右同断

一、同四丁亥年　免四つ六分
取米八拾壱石三升九合
一、慶安元戊子年　免四つ八分
取米八拾四石五斗六升弐合
一、同二己丑年　免四つ七分
取米八拾弐石八斗
一、同三庚寅年　免四つ三分五厘
取米七拾六石六斗三升四合
一、同四辛卯年　残ハ高ニ　免五つ八毛
取米七拾七石八斗六升
一、承応改元壬辰年三月七日、地押　免壱つ九分壱厘
取米弐拾五石壱斗七升七合
一、同二癸巳年　残ハ高ニ　免三つ六分
取米六拾弐石三升九合
御代官御替リ、真綿兵左衛門殿
一、同三甲午年　残ハ高ニ　免六分六厘
取米四石九斗七升七合
一、明暦改元乙未年　残ハ高ニ　免弐つ九分四厘
取米三拾弐石五斗六升五合
一、同二丙申年　残高ニ　免三つ七分壱厘
取米六拾弐石七斗八升三合
御代官御替リ、勝野太郎左衛門殿
一、同三丁酉年　免四つ〇五厘
取米七拾壱石三斗四升九合
御代官御替リ、山内小兵衛殿
一、万治改元戊戌年　免四つ壱分五厘
取米七拾三石壱斗壱升壱合
一、同二己亥年　免五つ
取米八拾八石八升五合
一、同三庚子年　免四つ八分弐厘
取米七拾九石壱斗八合
御代官御替リ、渡辺小治郎殿
一、寛文改元辛丑年　免五つ五厘
取米八拾八石九斗六升六合
御代官御替リ、村瀬彦左衛門殿
一、同二壬寅年　免四つ六分八厘
取米八拾弐石四斗四升八合
一、同三癸卯年　残高ニ　免弐つ五分
取米弐拾九石壱升六合
一、同四甲辰年　残高ニ　免五つ三分
取米八拾壱石三斗七升壱合
一、同五乙巳年　残高ニ　免四つ八分
取米七拾四石弐斗六升壱合
御代官御替リ、磯谷与右衛門殿
一、同六丙午年　残高ニ　免四つ六分八厘
取米七拾六石九斗弐升四合

一、同七丁未年　免四つ壱分四厘
取米七拾弐石九斗三升五合
一、同八戊申年　残高ニ免三つ三分
取米三拾石七合
御代官御替リ、横井五右衛門殿
一、同九己酉年　残高ニ免弐つ八分八厘
取米四拾壱石弐斗六升四合
御代官　杉浦弾右衛門殿
一、同十庚戌年　残高ニ免三つ弐分壱厘
取米四拾八石三斗三升三合
御代官御替リ、太田弥五右衛門殿
一、同十一辛亥年　免三つ壱分五厘
取米五拾五石四斗九升六合
一、同十二壬子年　免三つ四分七厘
取米六拾石五斗三升八合
一、延宝改元癸丑年　免三つ四分三厘六毛
取米六拾石五升八合
一、同二甲寅年　免弐つ八分弐厘五毛
取米四拾九石七斗七升七合
一、同三乙卯年　免弐つ七分七厘五毛
取米四拾八石八斗九升
一、同四丙辰年　免弐つ壱分〇六毛
取米三拾七石壱斗壱升弐合
御代官御替リ、五味所左衛門殿
一、同五丁巳年　残高ニ免三つ弐分七厘
取米四拾五石五斗五升三合
御代官御替リ、村瀬平左衛門殿
一、同六戊午年　残高ニ免三つ六厘
取米四拾七石六斗九升九合
一、同七己未年　免弐つ八分九厘
取米五拾石九斗壱升五合
一、同八庚申年　残リ高ニ免弐つ四分四厘壱毛
取米四拾三石七合
御代官御替リ、五味所左衛門殿
右之通リ高免ニ而、大小百姓中、殊之外困窮致シ、村中ニ板戸立家なし、田畑等ぇ肥シ得不致、耕作も成兼候、年々不作と申伝也、外ニ難義筋多、略ス
一、天和改元辛酉年　免壱つ六分七厘六毛
取米弐拾九石五斗四升八合
一、同二壬戌年　免壱つ八分九厘
取米三拾三石三斗九合
一、同三癸亥年　免壱つ九分三厘七毛
取米三拾四石壱斗三升八合
下段
一、貞享改元甲子年　免壱つ四分弐厘六毛
取米弐拾五石壱斗弐升五合
一、同二乙丑年　免壱つ四分八厘

取米弐拾六石八升四合

五月廿三日、藤吉喜三郎死去

法名、涼林宗安居士

一、同三丙寅年　免壱つ七分七厘六毛

取米三拾壱石三斗七升六合

一、同四丁卯年　免壱つ七分八厘壱毛

取米三拾壱石三斗九升三合

一、元禄改元戊辰年　免弐つ弐分〇四毛

取米三拾八石八斗三升四合

一、同二己巳年　免壱つ六分七厘五毛

取米弐拾九石五斗壱升八合

一、同三庚午年　免壱つ九分七厘七毛

取米三拾四石八斗三升八合

一、同四辛未年　免壱つ七分八厘七毛

取米三拾壱石四斗九升四合

一、同五壬申年　旱損　免五分五厘八毛

取米九石八斗三升六合

一、同六癸酉年　免六分五厘四毛

取米拾壱石五斗弐升三合

御代官御替り、加藤市良兵衛殿

一、同七甲戌年　免弐つ弐分〇三毛余

取米三拾八石八斗弐升弐合

廿六ヶ村へ

右之村々、太田町へ助郷申付候間、相触次第ニ人馬無滞リ、村々より可出之勿論、此帳面ハ太田町ニ差置、助郷之村ニ而も写シ置、自今以後可相守候、若費之人馬触致候歟、助郷より於不参者、曲事可申付者也

元録[禄]七年　戌二月

諸伝左衛門
萩彦治郎
井三十郎
稲伊与守
松美濃守
高伊勢守
太田村問屋年寄
助郷村々庄屋年寄

一、同八乙亥年　免壱つ五分九厘

取米弐拾八石壱斗弐合

一、同九丙子年　免弐つ

取米三拾五石弐斗三升四合

一、同十丁丑年　免壱つ八分九厘

取米三拾三石弐斗九升七合

一、同十一戊寅年　免八分

取米拾四石九升四合

当寅年より十ヶ年之間定免

覚

加茂野村南野方

野　東西五百四拾間
　　東横弐百間
　　西横弐百四拾間

同東之方

野　東西三百間
　　東横六拾間
　　西横廿八間

東ハ太田村・大針村・尾州様御領分野境、西ハ高巣村・同御領分野境、北ハ木野村ト蜂屋村ト野山入会之境也、木野ハ御料所、蜂屋ハ御料分也、南之方ニ而、東西五百四拾間　東之方七十六間　西之方五十八間　論所ニ御座候

正保二年、美濃国御絵図御改之節、尾州様より御改被遊、其以後相違無御座候、以上

元録十一年
寅正月廿八日

加茂野村庄屋　喜之助
組頭　八左衛門
野方庄屋　九郎左衛門

山本太郎右衛門殿

黒岩村ト出入済口之義、同村庄屋庄治郎ト申者、村中引連、論所へ棒を以罷出候所へ、当村より八左衛門・兵四郎・供壱人、三人出向候、論致、黒岩村ハ大勢ニ而、直ニ其場ニ而三人ヲ打倒シさんトする所、八左衛門、黒岩村庄屋庄治郎ヲ直ニ組ふセ、脇さし抜テのどニあて、生死之境ヲ挨拶致しけれハ、其節直ニ済口ト成、互ニ其場所ヲ引キ申候、　是ニ付いろ〳〵略ス

済口絵図面裏書写し

美濃国加茂郡之内、黒岩村ト加茂野村ト、草野数年境論有之、野境不相立候、加茂野村野高ハ七石弐斗、滝川彦治郎殿領知ニ付、右野境相立申渡之旨申来リ、依之我々見分遂吟味、絵図面之通リ野境ニ土塚七ヶ所築之、加印判、境相立畢、向後百姓共全不可綺之、仍為後証絵図令裏書、双方ぇ渡之間、於永々不可有違乱者也

元禄十一戊寅十一月

五味弾右衛門　印
蟹江角右衛門　印
加藤市郎兵衛　印

一、同十二己卯年　同断
一、同十三庚辰年　同断

一、同十四辛巳年　同断
御代官御替リ、三宅善八殿
一、同十五壬午年　同断
一、同十六癸未年　同断
一、宝永改元甲申年　同断
御代官御替リ、横地仁兵衛殿
一、同二乙酉年　同断
一、同三丙戌年　同断
一、同四丁亥年　同断
十二月十八日、藤吉八左衛門死去
法名、山南道雪居士
一、同五戊子年　免壱つ〇〇弐毛余
取米拾七石六斗六升壱合
一、同六己丑年　免壱つ六分弐厘
取米弐拾八石五斗四升七合
一、同七庚寅年　免壱つ九分八厘四毛
取米三拾四石九斗六升八合
一、正徳改元辛卯年　免壱つ七分六厘七毛
取米三拾壱石壱斗弐升四合
一、同二壬辰年　免壱つ九分六厘八毛
取米三拾四石六斗八升弐合
御代官御替　、三宅善八殿
一、同三癸巳年　免弐つ〇三厘三毛
取米三拾五石八斗三升弐合
一、同四甲午年　免壱つ八分壱厘壱毛
取米三拾壱石九斗三升弐合
御代官御替リ、生駒伊右衛門殿
御代　何村嘉左衛門殿（河カ）
一、同五乙未年　免弐つ〇五厘八毛
取米三拾六石弐斗五升八合
御代官御替リ、小沢九郎左衛門殿
一、享保改元丙申年　免壱つ九分七厘四毛
取米三拾四石七斗九升
一、同二丁酉年　免弐つ〇六厘九毛
取米三拾六石四斗五升七合
一、同三戊戌年　免壱つ六分六厘八毛
取米弐拾九石三斗九升壱合
一、同四己亥年　免弐つ〇五厘三毛
取米三拾六石壱斗六升八合
一、同五庚子年　免弐つ壱分六厘九毛
取米三拾八石弐斗壱升四合
御代官御替リ、何村嘉左衛門殿（河カ）
一、同六辛丑年　免弐つ〇七厘九毛
取米三拾六石六斗三升四合
一、同七壬寅年　当年より五ヶ年定　免弐つ〇五厘
取米三拾六石壱斗壱升五合

一、同八癸卯年　免同断
右
一、同九甲辰年　旱損ニ付、免壱つ六分六厘三毛
取米弐拾九石三斗壱升弐合
一、同十乙巳年　極免
右
一、同十一丙午年　同断
右
御代官御替リ、小久保弥五助殿
一、同十二丁未年　免弐つ三分六厘七毛
取米四拾壱石七斗八合
一、同十三戊申年　免弐つ六分〇八毛
取米四拾五石九斗五升壱合
一、同十四己酉年　免弐つ六分五厘八毛
取米四拾六石七斗弐升八合
一、同十五庚戌年　免弐つ〇三厘弐毛
取米三拾五石八斗壱升弐合
四月上旬より山犬方々ニあれ廻リ、昼中村方へ入込、拾歳以下之子共拾人余、村々　而取あやめ、壱人当座ニ而喰ころし申候（林清）ニ付、従尾州様より犬狩被仰付候而、同五月六日、従尾州様より（林清）犬狩御用ニ付、被相越候御役人
大代官飯嶋重左衛門殿
手代三人共
広田新左衛門
佐藤杢右衛門
渡辺宅右衛門
御国方両人
児嶋幸左衛門
園田利左衛門
濃州郡奉行
栗田六之右衛門
御手代
原只平治
右同断
井田源助
御手代
飯田勘蔵
右同断
神谷弥五左衛門
御手代
山内平右衛門
柴田孫助
御足軽衆両人
白木定右衛門
伊藤庄右衛門
右ハ名古屋御役人衆

柿鹿野村
鉄炮弐拾提　多田罷治郎右衛門
白谷村
同　拾提　長屋治左衛門
同　三十提　蜂屋村中
其外、村々ニ而鉄炮数多シ
右勢子之村数、御領分三拾六ヶ村、まとゐ壱本宛、人数割高ニ壱双(ママ)三分、他領見物者も勢子同様之拵ニ而、弐里半計リ引廻シ、卯上刻より午刻迄、太田村加茂大明神之森ニ而生捕
山犬　壱疋　はい毛、長弐尺五寸
貫目、九貫五百目
但シ水かき有、女犬
山ねこ壱疋　形、犬のことし
雉　三羽
兎　七つ
未刻、蜂屋村加茂大明神森
申刻、同村八幡宮之森
人足廿三人　加茂野村
内弐人　嘉助
助左衛門
右之犬追出シ、鉄炮ヲ打掛候而、御役人方へ追行、鎗ニ而付留被遊、右両人へ御召出シ(ノシ)、銀五匁つゝ被下置候
右之外、犬ニ棒ヲ当しもの迄、夫々ニ召出され、御国奉行所より御ほうひ被下置候
右定日より三四日後ニ、太田村所勢子ニ而、犬を狩出シ、弐疋つれ木曽川へ追込、川向へこさんとせし所を、善助と云ふもの、其まゝ川へ飛込、川中ニ而生捕、川きしにて打ころし、尾州へ犬をつらセ注進す、古今之手柄と御国奉行衆御言ニ預リ、金子壱分御ほうひ被下、難有頂戴致スナリ
一、同九月二日に、村々庄屋を名古屋御役所へ召出され、勢子之人足代并ニ玉薬代・まとゐ代ニ至迄、金子村々へ被下置、難有頂戴いたし、村方へ帰リ、難有御事悦ひ、立合割符仕者也
享保十六亥四月廿三日　写之
一、同十六辛亥年　免壱つ九分六厘壱毛
取米三拾四石五斗六升四合
一、同十七壬子年　免弐つ四分五厘六毛
取米四拾三石弐斗七升壱合
一、同十八癸丑年　免弐つ四分八厘壱毛
取米四拾三石七斗九合
御代官御替リ、栗田六之右衛門殿
一、同十九甲寅年　免弐つ五分六厘
取米四拾五石壱斗
一、同廿乙卯年　免弐つ五分七厘
取米四拾五石弐斗七升六合
一、元文改元丙辰年　免弐つ四分八厘
取米四拾三石六斗九升壱合

一、同二丁巳年　免弐つ七分
取米四拾七石五斗六升六合
一、同三戊午年　免弐つ五分七厘
取米四拾五石弐斗七升六合
一、同四己未年　免弐つ壱分九厘
取米三拾八石五斗八升弐合
一、同五庚申年　免弐つ壱分
取米三拾六石九斗九升六合
御代官御替リ、浅野久治郎殿
一、寛保改元辛酉年　免弐つ弐分
取米三拾八石七斗五升八合
御代官御替リ、鳥居覚右衛門殿
一、同二壬戌年　免弐つ弐分七厘
取米三拾九石九斗九升壱合
一、同三癸亥年　当年より五ヶ年定　免弐つ五分
取米四拾四石四升三合
□段
一、延享改元甲子年　定免
御代官御替リ、比木伝六殿
一、同二乙丑年　定免
一、同三丙寅年　定免
一、同四丁卯年　旱損ニ付、免弐つ三分五厘
取米四拾壱石四斗
御代官御替リ、桑原千之右衛門殿

一、寛延改元戊辰年　免弐つ弐分
取米三拾八石七斗五升八合
一、同二己巳年　免弐つ三分
取米四拾石五斗弐升
一、同三庚午年　免弐つ壱分五厘
取米三拾七石八斗七升七合
御代官御替リ、鬼頭伝大夫殿
［加筆］
［四月七日、紀州様御上国ニ付、当宿御泊リ］
一、宝暦改元辛未年　今年より五ヶ年　免弐つ三分弐厘
取米四拾石八斗七升弐合
一、同二壬申年　定免
一、同三癸酉年　定免
御代官御替リ、比木伝六殿
一、同四甲戌年　定免
御代官御替リ、本多嘉七殿
一、同五乙亥年　免壱つ九分弐厘
取米三拾三石八斗弐升五合
一、同六丙子年　今年より五ヶ年　免弐つ三分弐厘
右定免ニ而、坪籾弐合七勺ニ当ル
一、同七丁丑年　定免
一、同八戊寅年　免弐つ〇四厘八毛
取米三拾六石八升
八月廿三日、藤吉弥市郎死去

法名、松月道秀居士

一、同九己卯年　免弐つ壱分六厘
取米三拾八石五升三合
御代官御替リ、磯村藤七郎殿

一、同十庚辰年　定免

深田往還橋定之事

深田村引請之覚

一、名古屋行急御用往還并ニ橋御掛直シ諸事願事
一、御役人様方急御用御伯(泊)リ・御休
一、御触状根出シ日役小夫并ニ筆・墨・紙代
一、茶番・夜番・小屋道具諸色、内壱人、八ヶ村より出筈
右之通リ橋本深田村へ永々引請定

八ヶ村引請之覚

一、御奉行様方御小屋造用
一、御小屋掛人足
一、橋仕人足
一、諸事損料物
右之通リ八ヶ村、永々引請定

大工木挽引請之覚

一、大工木引宿自分払
一、賃銀・扶持方米、名古屋ニ而大工木挽直請取筈
一、大工木挽、近村地大工
是ハ、諸事大工木挽へ引請候様ニ被仰付可被下候

右之通リ、往還橋、宝暦八年卯秋、御掛直シニ付、造用割符及出入ニ、御役所表へ御達シ申候所、右之趣、任御差図ニ、橋本并ニ八ヶ村共納得仕、互ニ証文為取替、無故障様ニ相済申候、然上ハ重而御普請御座候節、右壱つ書之通相用申筈ニ御座候、為其連判、仍而如件

宝暦十年　橋本深田村庄屋　武助　印
辰十一月　同断　忠右衛門　印
組頭　安右衛門　印

一、高三拾石　尾州領ナリ　酒倉村
一、同五百七拾四石八斗　黒岩村
一、同弐百五拾石九斗　伊辺村
一、同百七拾六石　加茂野村
一、同百五拾七石五斗　大鉢村
一、同弐百五拾石　下古井村

一、同八百七拾四石六斗　上古井村
一、同千九百五拾九石五斗八升　山之上村
右村々御庄屋中
御役人様壱人伯ヶ弐百五拾文宛、御両人一所之御泊ヶ弐百文宛、
御払ハ引筈之極

大針村新池、当村より丑寅之方、境目、蜂屋村・木野村入相之場所ニ出来致、当村野方之内ニ井堀借地致、則、間数東へ三拾五間半、井領米三斗宛請取、四五年之内ニ禿ニ相成申候

一、同十一辛巳年　定免
一、同十二壬午年　今年より定免之所旱損ニ付　免弐つ〇八厘
取米三拾六石六斗四升六合
一、同十三癸未年　定免弐つ三分弐厘
取米四拾石八斗七升弐合
御代官御替リ、尾崎友治郎殿
一、明和改元甲申年　同断
一、同二乙酉年　免壱つ壱分弐厘
取米拾九石七斗三升弐合
一、同三丙戌年　免弐つ〇四厘
取米三拾五石九斗三升九合
御代官御替リ、金森市之進殿
一、同四丁亥年　卯迄定免之所、悪年ニ付　免壱つ七分五厘
取米三拾石八斗四升

一、同五戊子年　免壱つ七分六厘
取米三拾壱石六合
御代官御替リ、鬼頭林之右衛門殿
一、同六己丑年　定免
御代官御替リ、水野清左衛門殿
九月、南池開起　東西百間　南北三十間
立圦壱本（高サ五尺　巾　八寸四角）
伏圦壱本（長　五間　巾　八寸四角）
一、同七庚寅年　旱損ニ付　免壱つ六分五厘六毛
取米弐拾九石壱斗七升四合
当九月下旬、飛驒御軍代大原彦四郎殿、給地之義ニ付、百姓一揆起シ多ク死ス、飛驒ヲ逃出シ、此所通リ、木曽川ヲ渡シ、追々逃行ニ付、尾州様よりも、犬山よりも、川筋渡シ〳〵へ鉄炮持御出張、諸役人被相越、百姓共難義、其後相納
一、同八辛卯年　続テ旱損　免壱つ八分六厘弐毛
取米三拾弐石八斗三合
御代官御替リ、横井此右衛門殿
一、安永改元壬辰年　今年より五ヶ年定免
当年より南鐐ヲ弐朱ト取扱、四文銭通用、然共、当国通用ハ此後、寅年時分より取扱也

御代官御替り、加藤九郎左衛門殿
五月廿四日、藤吉弥左衛門死去
法名、松嶺道栄居士

一、同二癸巳年　定免
一、同三甲午年　定免
同四乙未年　免壱つ六分七厘
取米弐拾九石四斗弐升壱合
閏十二月九日、藤吉惣治郎死去
法名、知足了背居士
一、同五丙申年　定免
取米四拾石八斗七升弐合
四月廿一日、日光山ぇ大納(言)源家治公御社参
御代官御替り、谷川和七殿
一、同六丁酉年　免弐つ弐分
取米三拾八石七斗五升八合
一、同七戊戌年　免弐つ壱分九厘
取米三拾八石五斗八升弐合
尾張中納言宗睦公、濃州錦織ぇ御成、兼山村山本藤九郎、新ニ御殿立御泊リ
四月三日、紀伊中納言殿、御上国ニ付、伝馬多ク当ル(リ)候、鵜沼宿・太田宿合宿之所、追々御願申上候而、太田宿寄より人足三百人手伝ニ而相済
一、同八己亥年　定免

二月八日夜、蜂屋村瑞林寺焼失
一、同九庚子年　定免
世の中宜敷、穀類大下直、文金壱両ニ米壱石五斗也、夫ニ付、大百姓格別難義なり、御裏判金と申テ、御役所手代衆より借用仕候金四拾五両、十ヶ年無利ニ而延之筈ニ成禿レ
一、天明改元辛丑年　定免
世の中宜敷、穀類下直なり
尾張御代々
大納言義直公
大納言光友公　瑞龍院殿
中納言綱誠公　大直院殿
中納言吉通公　円兵院殿
中納言継友公　光善院殿
中納言宗春公
中納言宗勝公　賢降(隆)院殿
中納言宗睦公
当三月、御任官　従二位大納言被任
若殿様、宰相ニ被任
御子息御誕生、五郎太様ト申、二月朔より三日之間御能
正月、名古屋大火事、御下屋敷焼失ス
一、同二壬寅年　定免
四月晦日ヨリ、太田村と東境松之義ニ付、工事いたし、夫成ニ而終、然共、境松枯木ニ相成□(候)共、両村より綺事不成

米下直、両ニ壱石四斗
御代官御替リ、井田忠右衛門殿
太田御役所、御普請初ル
一、同三癸卯年　定免
三月上旬、御役所出来、御引越
井田忠右衛門殿
御手代
山中善兵衛
岸上弥治右衛門
三浦又四郎
竹中佐兵衛
後藤喜代治
岸上此八郎
御足軽
伊藤喜右衛門
佐藤利吉
坂井松兵衛
右衆中方御引越被遊候
五月四日、大キ成氷大降ニ而、所ニより三日之間も消ス、麦苅入前ニ而打落、大麦・小麦弐分、世の中、所ニより実なし、立毛大痛
六月廿六日夜より七月十日迄、信州あさま山大焼、日本之内廿四ヶ国響、其音雷のことし、十里計リ之間、砂ふり、田畑禿ル、米高直、両ニ七斗九升
一、同四甲辰年　定免
三月廿四日、於殿中、佐野善左衛門ト田沼山城守と刃場ニおよひ、山城守対シ、右善左衛門、揚リ屋へ入ル後、切腹被仰付、事相済
神田山徳本寺ニ石塔立
改名、元良院釈以貞居士、正定聚位、行年廿八才
世の中にすむもにたるも水のあわ
我身ハもとのこけにこそなれ
尾州様御改格
御国奉行人見弥右衛門殿、御国廻リ
尾州・□州、御冥加普請初リ、鵜沼村大安寺川・太田宿ニ而やた川、当村よりも両村へ手伝ニ遣し
尾州犬山古津井水通リ、名古屋ひわ嶋迄舟通用、米高直、両ニ七斗位
一、同五乙巳年　定免
世の中宜敷、穀類高シ、名古屋大火事、建中寺焼失
御国奉行間宮外記殿、御国廻リ、米両ニ八斗五升位
一、同六丙午年　免壱つ九分弐厘
取米三拾三石八斗弐升五合
七月十日、将軍家治公御他界
爰ニ人王百十二代御宇
壱　東昭宮　元和二年四月十七日

二　秀忠公　寛永九年正月廿四日
三　家光公　慶安四年四月廿日
四　家綱公　延宝八年五月八日
五　綱吉公　宝永六年正月十日
六　家宜公　正徳二年四月卅日
七　家継公　正徳六年十月十四日
八　吉宗公　寛延四年六月廿日
九　家重公
十　家治公　天明六年七月十日
　　御長男家基公御他界　依テ
十一　家斉公

御世、遠州相良城主田沼主殿頭といふハ、小西摂津守行長末葉ニ而、泉州堺町人之子な□(り)、享保ニ出生シ、知恵はつめいニして、武家ニ奉公致し、狐之祈リニ依テ千金幸ひ得、享保十六年ニ、御旗本田沼専右衛門トテ六百石家へ、千金を以養子ト成し、(是迄之事多ク略ス)松平右近将監之執成ニ依テ、十九才ニ而西丸家重公御小姓ニ被仰付、御切米三百俵被下置、同廿年卯三月、父相果、跡式六百石被下置候所、元文二年巳十二月廿一日、五位下任主殿頭、延享四年卯九月十五日、御小姓番頭格ニ被仰付、奥向兼帯、御加増千四百石、寛延四未七月十八日ニ御側御用取次、宝暦五亥九月十九日、三千石御加増、同八寅九月三日、五千石御加増、都合壱万石ト成、同十辰年より家治ヘ仕、同十二午十二月、五千石御加増、明和四亥七月朔日、五十弐才、御側御用人、五千石御加増、都合弐万石ト成、従四位ニ被任、遠州相良ニ新城ヲ築、同六丑十二月、御老中格持従ニ被仰付、御加増五千石、加判之例ニ被仰付、奥向兼帯、安永六年酉四月廿一日、七千石御加増、天明元丑七月十五日、壱万石御加増、同五巳年、御本丸御老中、壱万石御加増、都合五万七千石ニ相成、同六年午八月廿七日、御役御免、弐万石御取上ケ、家基公鷹狩之帰御より御ふれい御他界、又々家治公も鷹野之帰御より御ふれい御他界ニ付、御ふしん相懸リ、御知行御取上ケ、壱万石ト相成、享保十九年より今天明六年迄五十三年ニ成、我一代ニ町人より五万七千石之大名ト成も、太閤已来之事ナリ

大坂ニ蔵屋敷　金銀・米銭其外宝物不知、略ス
相良新城築
江戸御屋敷并蔵屋敷多し
右ニ米穀類・油等迄囲ひ〆、穀類高直ト成

八月十七日、日光御門主様御下リ、伝馬大当リ
八月・九月、両度大風、田方不作ニ而惣百(姓)中難義、野方御直段六斗かへヲ御願申上候而、八斗かへニ相成、穀類高直、両ニ五斗五升

一、同七丁未年　定免
当春より穀類高直、大き丶ん、草木之葉ニ而命助ル

三月廿一日、大浪風ニ而麦実なし、別而高直

銭、両ニ六貫文

金壱両ニ付、米弐斗六升

麦壱升ニ付、百四文

銭百文ニ付、稗壱升三合

右ハ尾州犬山ニ而、穀類買居候所、犬山売切レ、人多ク死ス、略ス

七月廿一日、公儀より被仰付、太田御役所へ伝馬勤方之義ニ付、廿六ヶ村庄屋・組頭・定使ニ血判被仰付候

天明七年

未七月廿一日

庄屋 利左衛門 石ハ（花押）

門蔵ト改 血判（佐手）

組頭 嘉助 右同断

定使庄八 右同断

右之通リ、御役所へ血判仕、差上申候、以上

当秋、作宜敷、穀類少々下直ニ成、米両ニ七斗弐升

公義御改格、大御老中、松平越中守殿

一、同八戊申年 定免

当春より穀類下直ニ成、世柄宜敷、佐野善左衛門殿ヲ世直シ大明神トいふ、米両ニ九斗位

正月、尾州様御国中、御囲籾・御年貢米之外、高壱石ニ籾三合、右永々村方ニ御預ヶ之筈、世話成

正月晦日より二月朔日迄、京都大火事、八分通リヤケル

大内裏様御焼失、正誰院宮ニテ（迄）御借家

五月中旬、御大老松平越中守殿、禁裏様御普請ニ付、御登リ、夫より諸大名衆御改格ニ付、道中助郷大キニ宜敷

七月八日、御巡見ニ付、下麻生宿出ル

裁許 壱人

人足 八人

馬 壱疋

小使 壱人

右之通リ、下麻（生）より兼山迄持送リ、前々より之割付也

松平越中守殿より専阿弥ヲ以

御城附へ被仰渡候書付之写シ

一、博奕・賭之諸勝負、前以御法度ニ候所、近年一統相ゆるみ、博奕・賭之諸勝負等之色々名目を付候而、武士屋敷・寺社亦ハ茶屋并ニ辻等ニおゐて、右体不埒之儀致候趣ニ相聞候、以来ハ右体之儀有之候得ハ、急度可申付候、尤吟味之上ハ、懸合之先々迄も無用捨相糺仕置可申付候、尤右体不埒之者有之候得ハ、密ニ奉行所へ可訴出候、急度御褒美可被下候、同類之内たり共、訴出候而、自分旧悪をも相改ニおゐてハ、是又御褒美可被下候

右之趣、町方ハ辻々ニ張置、在方ハ高札場又ハ村役人之宅前ニ張置、町役人・村役人・五人組合切ニ申合、互ニ改可申候、武家ニ而も、家来并ニ末々之部屋〳〵ニ到迄、無油断相改可申候

右之趣、御料・私領・寺社領・町方迄、不洩様ニ可相触候

天明八年　　井田忠右衛門

申二月

五月上旬、禁裏様御普請ニ付、国々社木伐出候様被仰候ニ付、当村

住吉大明神境内ニ而桧五本

貴布祢大明神境内ニ而桧廿三本

都合廿八本 目通り四尺より六尺廻り迄

代金四拾八両

右之金子、公儀より不残出候而、村方惣百姓中へ被下置候趣ニ御触有之、村中割符仕所、又翌年、代金不残、尾州寺社方へ御引上ヶ御預リニ相成候而、村中難義致し候間、ヶ様之事共、末々ニ至迄相心得可申候

一、寛政改元己酉年　　定免

御代官御替リ、月ヶ瀬善治郎殿

二月十一日、尾州宰相様、錦織へ御成　　土田宿へ　人足　六人

裁許　壱人

小使　壱人

御泊リ　　兼山村、山本藤九郎

三月下旬、北郡上海道大田村ト境松より今泉村境目迄、五百九十四間之間、道悪敷、往来之諸人馬難義ニ付候所ニ

金六両　　山県郡留長村、元右衛門手伝

右之金子を以直シ、海道通用宜敷成

太田村・深田村火消之事　　人足　八人

右ハ両村ニ出火有之候得は、村役人之者共人足召連、御役所へ可罷出候、殊ニ近年、太田宿ニ御役屋敷も出来候間、無油断早々欠付可申候、其上、御役所より差図可請候

酉三月　　月　善治郎

〔米両ニ八斗位 加ヤ〕

御国奉行五味平馬殿、御国廻リ

一、同二庚戌年　　免壱つ九分弐厘

取米三拾三石八斗弐升五合

麦作宜敷、六月より旱続ニ而、秋不作

りうきう人来朝、十一月七日、みや泊リ

禁裏様御普請出来

十一月廿二日、御ワタマシ

御触書写シ

近ヶ比在々ニ而、浪人者并ニ虚無僧・其外胡乱成者、令徘徊、

合力又ハ宿等無心申懸、断申聞候得共、彼是難渋候之由相聞候、右之義ニ付而ハ前々相触置候通リ、たとひ何者ニよらす右体之者共、金子之無心申懸、或ハ人馬を遣ひ、或ハ宿等支度を好候者有之候得は、厳敷可断及候、夫共押而無心申懸ニおゐてハ、其者之性名(姓)相尋、其所ニ押留置候而、早々可申出候、若理不尽・強気ニ而手ニおよびかたく候得は、打倒搦置、可注進事

右之趣、御支配御役所より被仰渡候、以上

戌十月　　庄屋　門蔵

右之通リ相触候様ニ、御国奉行衆被申聞之間、相触之候間、承知之上早々相廻し、納村より可返候、以上

戌十一月　　月　善治郎

村方定三昧弐ヶ所

内

南野之内　　壱ヶ所

中野之内　　壱ヶ所

右弐ヶ所共ニ野方(是ハ引はか)

御旗本滝川源八郎殿御知行所ニ相済置候間、末々ニ至迄、右之通リ相心得可申候、以上

右三昧之儀ハ、尾州寺社方御奉行所より御改之節、右之通リ書上置候間、若々不都合事有之候ハヽ、瑞林寺ニ而伺可申候

戌七月　　庄屋　門蔵

一、同三辛亥年　　免壱つ九分壱厘

取米三拾三石六斗四升九合

六月朔日　津嶋天王様御遷官

右ハ先例依テ御国中勧化、鳥目五百文、当村より差上申候

綿布役被仰付候事

女人之分(十四才より六十才迄)　家々持高ニ応シ割符也

一、高(壱石目より九石目迄)　持百姓、女壱人ニ付、(壱尺つ、代銀弐分五厘)

一、高(拾石目より拾九石目迄)　持百姓、女壱人ニ付、(弐尺つ、代銀五分)

一、高(廿石目より四十九石目迄)　持百姓、女壱人ニ付、(四尺つ、代銀壱匁)

一、高五拾石以上持百姓、女壱人　右同断

右之代銀之儀ハ、永々凶作之節又ハ損亡致シ候者共ヘ被下置候筈

天明八年より、石三合御囲ひ籾之義、御免被遊候

八月廿日、大風、五十ヶ年以来之大風ト相聞、諸方ニ而家多ク吹倒シ、田畑不作、世間困窮、穀類高直成、米両ニ六斗かへ

野方御年貢壱斗御用捨ニ成、御直段、両ニ七斗かへ

一、瑞林寺和尚通隠ニ而、寺社御奉行へ御引上ヶニも相成所、格別之諸役人[illegible]　[illegible]迎相済、相尋候所、紀州新宮ヘ御出候而、御迎ニ行、首尾克前之通リ住職相済

尾州岩倉大神宮建立、御国中勧化相済、(神)官主吉田志津磨

一、同四壬子年　辰年迄五ヶ年　免弐つ三分弐厘

取米四拾石八斗七升弐合

御代官月ヶ瀬善治郎殿、此度御転役被遊候、此御代官ハ、殊之外百姓御取廻しニ付、末々至而ハ御奉行ニも御転役被遊候と、百姓共悦ヒける

正月御代官御替リ、馬場要助殿

右ハ小牧方御代官ニ而、太田御役所御預リニ相成、殊之外不都合成

六月御代官御替リ、長坂萩助殿

七月廿六日、大風之所、此方痛なし、西国筋丸(九)州不作、五分之世の中、又々九月八日大風、此節も土用後ニ而、此方痛なし、田畑十分之世の中、然共、殊之外大風ニ而、家多ク吹倒シナリ

西国筋、両度之大風ニ而米なし、大坂より此方迄、米買廻リ候故、米高直、両ニ六斗、但シ升かす

十一月中旬より、尾州御領分米札通用被仰渡、下々へ□(一)二月渡ル

十二月上旬より、異国軍おこるよしニ而、日本も軍御催シ、所々出張有

尾州様、知多郡室崎御出張有、追々軍しらべ、武具・馬具相改有、新ニ出来ル折々、軍出立揃有、給人方・百姓共軍用金当ル難義なり、然共、翌年三月相納、何事もなし

一、同五癸丑年　定免

公方様御娘君様、尾州五郎太様へ被下置候

六月三日、就吉辰、五郎太様より淑姫様へ御結納、御祝義物被進之、右ニ付、両殿様并ニ五郎太様御名代、弾正大弼様為御礼御登城、両殿様御盃事相済、御腰物拝領、且、五郎太様へも御刀・脇指被進、御首尾無残所被為済候

右之趣相触候様、御国奉行衆被申渡候間、村中不洩様ニ可相触之候、承知之上村下ニ印判いたし、留村より可返候、以上

六月九日　長坂萩助

六月八日、鷹巣村と井水堀之義ニ付、出入出来致し、右村より庄屋伴六・給知庄屋市右衛門、当村へ相見候而挨拶ス、当村ハ、当番ハ助左衛門、年番之者兵四郎・嘉助・門蔵四人出会、高巣村伴六被申候ハ、私村方塚本田面ニそい、用水やら悪水はきやらニ井堀御さ候、其井堀より私新田へ水ヲうけ候得は、其村方より折節とさまたけ被遊候欤、此義ハ重而ハ御無用可被下由ヲ申、門蔵罷出挨拶ス、其村方之井堀ハ何方ニ御さ候哉といふ、伴六被申候ハ、塚本田面北ふちそいの井堀之由被申候、門蔵いふ様ハ、夫ハ以の外之事ニ而候、其井堀通リハ、加茂野村浦田面より西田面迄之用水堀之由申、又々伴六いふ様、然ハ其井堀筋ハ何方迄も其村方之ニ而候哉といふ、又々門蔵申様、西田面之下境迄ハ此方之堀ニ而候と申、又々伴六被申候、是ハ私物之たとへニ而候欤、先此堀ヲ蜂屋

村之川ト思召セ、此川欤蜂屋より今泉村、高巣村、市橋村、田原村と流レナリ、蜂屋川ト申セ共、今泉ハ今泉村之川、高巣ハ高巣村之川、市橋ハ市橋村之川、田原ハ田原村之川ナリ、然ハ、此堀も塚本田面ニそい候分ハ高巣村之堀と存候といふ、又々門蔵申様ハ、成程蜂屋村之川ニ而候、村々へ付候分ハ其村其村之川ニ而候欤、右蜂屋村之御田地欤、高巣村、田原村ニ御さ候哉といふ、伴六返答ハ、夫ハ御ざなく候といふ、又々門蔵申様ハ、当村ハ西田面と申欤御さ候故、加茂野村之井堀筋ニ而候といふ、伴六・市右衛門も一言も不申被相立候所、先暫ク御待被下、隣村之事ニ候得は、出入等致シ候而不宜候間、何卒是迄之振合ニ致候而ハいヶ欤と申候所、是迄欤間違故、ヶ様之事共ニ而候と申、直ニ被相立所ニ、又々門蔵申様ハ、天明六年丙午正月十六日ニ、其村方新池初之節、立会申置候所、耕作道、去冬之緩之節、土持出され候而人馬通用成難候間、何卒秋先迄ニ御直シ可被下様ニといふ、夫ハ私共両人両見ニハ難相成由ニ而、被相立、夫より出入ニ相成、同十日御餘(呼カ)出シ、御役所御吟味有之、直ニ御手代伊藤弥儀右衛門殿御見分、案内門蔵・伴六、西田面之野ニ而所々ニ而論有、此方勝利ニ而相帰リ申候所、御代官思召違ニ依テ、加茂野村之水わけ遣シ候由ヲ御裁許有之、追々御断申上候而、又々御見分ニ相成、御代官長坂萩助様・御手代三浦又四郎殿・御足軽山田源次殿、案内伴六・門蔵両人、殊之外首尾克相済、中野之分・井堀共、加茂野村西田面之中ニ而候得は、加茂野村分ニ相違なし、高巣村伴六新田土之分、堤下ニ而少シ分ハ高巣村ト被仰渡、双方納得仕、御裁許之趣、左ニ相印置

為取替申証文之事

一、今般、加茂野村西田面と高巣村塚本田面と、井水堀并ニ耕作道等之儀ニ付、争論出来仕、村方ニ而ハ難相済、太田御役所え及出願ニ、御見分被成下、御裁許之趣、左之通リニ御座候

一、加茂野村浦田面より西田面迄、同村地内ニ用水堀御座候処、同村浦田面之下も大せきより、同村西田面北上ミ南北分レ堀迄、百六拾三間之間、たり水之儀ハ鷹巣村塚本田面え遣ス筈ニ候、右分レ堀より下、両筋共、高巣村田面へ水口あけ申間敷筈ニ候

一、加茂野村西田面へ池用水遣し候儀ハ、三日ニ一日つゝ之筈ニ候、右用水引初之日、高巣村へ加茂野村より申遣シ、夫より高巣村塚本田面水口、加茂野村より留メ可申筈候、勿論定日之通リ間違なく之様ニ、村方え可申触筈ニ候

一、加茂野村浦田面下も大せき之井杭、両村立合入置候間、右井杭、両村立合相談之上ニ而、綺可申筈ニ候、且又、加茂野村西田面へ用水遣シ候節、亦ハ大水之節、右井杭之芝ぬき遣ス筈候、勿論右大せき、高巣村より綺申間敷筈ニ候

一、加茂野村井堀北添耕作道之儀、同村地内ニ而、高巣村塚

本田面北へ付、同村天乳池堤下通リ、同村起返シ田未申角迄御座候処、高巣村と御科今泉村之境目より西へ分レ堀迄六拾八間之間、道巾概シ弐間、右ハ前文堀間数之内、此外右分レ堀より堤際迄拾弐間之間、道巾右同断、夫より起返シ田未申角迄八拾八間之間、道巾四尺より六尺迄之筈ニ候

一、高巣村天乳池堤、馬踏中より南え松生之儀、耕作道添之分、六尺以下より延申間敷筈ニ候、且又堤ぬけニ而、井堀并ニ耕作道差支之節ハ、高巣村より直し可申筈ニ候

右之趣、御差図請、両村納得仕、相定置候之間、此以後互ニ違乱成儀、堅ク仕間敷候、為後日為取替証文、仍而如件

寛政六年
甲寅四月

高巣村庄屋　同村給知庄屋　高井伴六　印
同村庄屋代　甚兵衛　印
同村組頭　市兵衛　印
加茂野村庄屋　儀左衛門　印
同断　助左衛門　印
同断　門蔵　印
同断　兵四郎　印
同断　嘉助　印

右之通リ写シ壱通、御役所へ差上申候、両村え壱通つ、納置候

御触書

去冬より通用米切手、いつれ之者ニ而も、若似セ作る者有之段、見及聞及候得は、早く其筋へ可訴出候、相違無之ニおゐてハ、訴人え急度御褒美可被下候、存なから訴出さるニおゐてハ、可為曲事者也

寛政五年
丑七月

長　萩助

八月晦日、尾張宰相様御逝去ニ付、下も々百姓共迄相悔申候、源白様と申奉

当冬、格別暖気ニ而、十一月中旬、大針村留右衛門方ニ而、大麦穂出ル、菜花・ゑんとうの花咲

十二月下旬、木曽川出水、流木多ク有、殊之外六ヶ敷候而、御領分ハ不及申、御領・私領共川筋二里外迄も、家さかし有、人多ク難義いたし

一、同六甲寅年　定免

五月上旬、名古屋堀川御冥加普請有リ、当村御手伝として銀五匁上リ

御国奉行衆・御国方吟味役衆御役名并ニ御国方役所唱方、別紙之通リ改リ候ニ付、相触候之間、村中不洩様ニ可申聞候、承知之上、村下ニ庄屋印形いたし、早く相廻し、納村より可返候、以上

寅六月　　長　萩助

御国奉行

右ハ、御役名、以来、御勘定奉行と相改候事

御国方吟味役

右ハ、御役名、以来、地方吟味役と相改候事

御国方役所

右ハ已来、地方御勘定所と相改候事

五月下旬より八月朔日迄、是そといふ留なし、然共、当村ハ差而大痛なし

野方御地頭　御旗本　滝川佐門様

同　源八郎様

江戸　御用人　細野善右衛門殿

松村郡内殿

木藤勝右衛門殿

濃州則光村　御国家老　石川惣左衛門殿

同　和平太殿

江州　御代官　山本文七郎殿

同　磯三治殿

丹州　御代官　石原三左衛門殿

同　三之進殿

一、高弐百五拾四石弐升五合　濃州　則光村

一、高百九拾三石四升　同　為岡村

一、高弐百弐拾六石壱斗三升　同　山本村

一、高拾九石六斗五合　同　野原村

一、高七石弐斗　同　加茂野村

〆七百石

一、高四百八拾壱石壱斗五升　江州　蒲生堂村（カモウト）

一、高百八拾石壱斗三合　丹州　大戸村

一、高九拾七石八斗九升七合　同　高屋村

一、高五百五拾五石壱斗七升　摂州　潮江村（シヲ）

〆千三百拾四石三斗弐升

合テ弐千拾四石三斗弐升也

寛政六年寅二月、江戸大火ニ付、御屋敷御類焼ニ付、御知行所中、御普請金割符

金弐百両

右高ニ割、壱石ニ付、銀六匁つ、

金弐分・銀拾三匁弐分　加茂野村

右へ金三分上リ

右高割御用金等ハ、是迄差上候事ハ御座なく候得共、今般格別之義ニ付、差上申候、御年貢之外、諸役懸リなし

九月朔日、五郎太様御逝去ニ付、十一月九日以、上使被仰立候　[源懐様と申奉]

勇丸様御事、御養子被仰出候由
右之趣相触候様ニ、地方御勘定奉行衆被申聞候之間、村中不洩様ニ可申聞候、此状承知之上、早く相廻し、納村より可返候、以上
十一月　長　萩助
右、勇丸様と申ハ、大納言様御舎弟掃部頭様御次男ニ而候

宮脇新池之事
初り東西南ニ而廿九間
同北ニ而廿三間
南北十三間
右ニ金子拾壱両・銀五匁頂戴
乍恐奉申上候御事
一、当村御知行所、野方之内ニ弐反歩程之雨池掘申度候ニ付、先達而御願申上候処、御聞済被下、難有奉存候、付而ハ村中并ニ近村共へ故障之義無御座候、仍之奉申上置候、以上
寛政六年　尾州御領
寅十月　加茂野村庄屋　門蔵　印
同　与頭　兵四郎　印
百姓惣代　嘉助　印
滝川源八様御内
山本文七殿
同　磯三治殿
右之通り、両御役所へ差上置候写し

一、同七乙卯年　定免
正月、御領分中、高札之名前書替有
先年ハ　竹腰山城守
成瀬隼人正
当年相改　成瀬隼人正
竹腰小伝次
右之通りニ而、書替有ナリ
当五月より秋迄、雨降続、所々大水、世の中悪敷、穀類高直
八月廿九日、大風あと先三日之間、[加ヒ米七斗余]
九月廿日、勇丸様御逝去
同廿二日、高須、松平摂津守様御卒去ニ仍而、大納言様御舎弟弾正大弼様御相続相済
九月、両宮修復
西宮箱棟、東宮箱棟・浜掾・土台・瑞
大工作料金三両ニ而渡し、壱両まし遣ス
大工　上蜂屋　春見八郎右衛門
上葺代金壱両壱分　葺師　下川辺村　惣右衛門
此節、金八両壱分、寺社方より出ル、外ニ金五両、御願相済候而、雑木拾本拝売払、右修復入用ニ致ナリ
十一月朔日、遷宮
一、同八丙辰年　定免
三月、紀州様御上国ニ付、合宿御断願ひ
乍恐書付を以申上候御事

今般、紀州様御通行ニ付、人馬継立之儀、鵜沼宿と合宿之趣、太田宿問屋中より被申聞候得共、前日朝より当宿へ罷出おり(ママ)へ入、夜通シ居申候而、長丁場持送リ候故、難義ニ奉存候、大分人足疲レ申儀ニ御座候故、下々の者共より、合宿之義ハ得不相勤候と申聞候ニ付、合宿之義ハ不仕候、此以後、御大身諸大名様方御引続キ御通行之節、大人馬御入用ニ御座候共、一宿継ニ可仕候、此上、他領助郷ハ合宿仕候共、御領分助郷ハ一宿(イチ)継ニ可仕候、右之趣ニ御座候得共、御役所様より被仰付御座候上は、御他領助郷合宿不仕候共、御領分助郷之義ハ可奉畏候、仍之書付差上申候、以上

寛政八年　　尾州領村々

辰三月　　庄屋　印

長坂萩助様

御役所

右之通リ差上申候書付写し

三月廿七日、太田宿、紀州様御泊リ

人足千五百五拾六人・馬百三拾六疋

右之通リニ而、継立仕、少も不事なし

辰三月廿八日、太田宿より鵜沼宿迄

当村より御役所被仰付ニ而、名前（嘉助　紋蔵）太田宿へ出、会所役相勤ルナリ

三月廿三日以、上使被仰出候

敬之助様御事、御養子之由、被仰出候間、村中相触候様ニ御勘定奉行衆被申聞候之間、不洩様ニ可申聞候、此状承知之上、早く相廻し、納村より可返候、以上

三月　　長　萩助

右敬之助様ハ、家斉公御次男ニ而、此度御養子相済被遊候

四月晦日、氷大降リニ而、村々麦大痛、所ニより実なし、然共、此辺ハ□(朴カ)ル事もなし

五月十七日、瑞林寺十五世法住中和尚禅師御遷化、香焼弐百文、　［頭分］(加ヵ)

十二月廿七日ヨリ勢州津和泉守殿知行所、百姓共一揆起、津町中、三日之間不引ケ、往来一日留ル

一、同九丁巳年　　定免

銀拾匁　　門蔵

銀拾匁　　嘉助

右ハ、去春、紀州様御上国ニ付、太田宿へ罷出、人馬取扱候、為雑用被下置候、以上

巳正月　　長　萩助

三月十二日、敬之助様御逝去

世の中宜敷、麦作・秋作共八分位、立毛悪しく、春より五月迄旱続、然共折々小雨ふり、夫より九月五日迄旱続、少々つゝ雨なり、又九月五日より翌年正月五日迄少も雨なし、麦出来悪敷

三月比よりいろ〳〵植木はやり、かうじ抔殊之外高直、黄実かうじ壱本ニ付、金子百両、弐百両致し候、此辺ニ而も壱本ニ付、弐朱位より壱分、弐分ニ売申候

一、同十戊午年　定免

改暦　須天審象　定作新暦　依例頒行　四方遵用

正月、取組村往還加へ之義ニ付、往還方御役所へ願出シ候得共、時節柄悪敷故、不相叶、是迄相勤候義無御座候得は、紀州様御上国之時、初而人足出シ、往還帳面も拝見仕候処、不相分候故、時節ヲ相待、末々ニ往還筋之義ニ付、難義も候節ハ御願可申義と存候故、上古井村・太田村ニ当村ぇ願書も写シ置者也

正月五日より四月迄旱、少々之小雨あり、麦作出来方悪敷処、四月七日大風雨ニ付、麦作五分、西美濃筋水入、木曽川大水、太田宿町中ニ而水壱丈計リ、ひさしより舟ニのり万尺寺へ逃ルなり、深田・酒倉・取組迄流家多シ、鵜沼宿より笠松迄往来舟通用、下中屋村ニ而切レ、加納・岐阜一面ニ大水、中山道往来壱ヶ月程留ル、此風雨ニ而、其所ニ立毛少もなし、四月七日より五月中比迄ふり続、[加リ]「穀類高直、米両ニ八斗位」

当月十三日、上使松平伊豆守殿を以、愷(ヤス)千代様御義被遊御世話、御養子被仰出候、追而淑(ヒデ)姫君様御輿入可被為在旨仰出候、此由不例支配ぇ可被相触候

源田彦九郎

成田貞之右衛門

五味平馬

四月廿一日

右、愷千代様と申ハ、一ツ橋民部卿御子息ニ而候、家斉公御甥、淑姫様と申ハ家斉公御姫君様

四月廿九日、信州善光寺如来、当村往還、関より太田へ御通行、其節御馳走ニ茶セったい出し、御小休有り、殊之外奇特之村方也とて、別当大勧進御言葉有之、太田宿迄送り

七月朔日、京大仏、雷火ニ而焼失ス、殊之外大へン

同十五日、津保川・郡上川大水、是も四月之大水より多し、曽代村流家多し、川筋大水入、往昔より是程之水ハ不覚と申事、津保川筋、所々御赦ひ御普請、村々ニ而金千両、普請多し、西川筋、美濃御国普請金、拾八万両ニ而少々残リ、又前金ニ三割増ニ被下置、村々大悦、米高直

八月上旬より岡崎矢はき橋掛直し、翌年三月ニ出来

同朔日より十月朔日迄、遠州秋葉山御開帳

関宗休寺、善光寺大勧進御隠居所となる

一、同十一戊未年　免弐つ壱分弐厘

中山道往還筋、勝山村・取組村拾(カ)丁場掃除人足指出方之儀ニ付、願之趣承届候、右ハ是迄掃除人足出方、両村より触当候処、左候而ハ村方費用も相懸リ、且、取組村丁場之儀ハ平地故、多分之人足不相懸事ニ付、以来取組村より加へ村々ぇ之触出ハ相止メ、向後勝山村より触当、右人足之内を以、両村

丁場無手抜掃除可致候、勿論人足引分ヶ方等兼而相調置、不都合之儀無之様、節々取組村とも申合、急度取計可有之事

未五月

往還方

勝山村
十六ヶ村代　上古井村
右村庄屋

御家督相続被仰渡候事

正月ヨリ四月迄、関宗休寺、善光寺如来地築手伝人足、五里四方ヨリ毎日千人余出ル

大勧進権僧正、六月朔日御入、十七日迄御逗留

（畢）

当春より冬迄、日本中疱病流行ニ付、人多ク死ス

六月上旬より大旱、八月迄旱続、七月中旬、多度大神宮迎ひ雨乞信心仕所、大雨ふり、雷三つあまり、相応之実のり、近村旱損

八月十二日、日光様御下リ、伝馬多ク当リ

同月、尾州寺社方ヨリ両宮境内并社拝殿共ニ御改、絵図面ニ致し差上申候写し、庄屋御用箱入置

九月十一日、愷千代様御登城、御元服、御一字頂載、被任叙従三位中将候

十一月十五日、淑姫様御輿入、御慶子事相済

十二月廿四日、後廿日、大納言様御逝去被遊候事、源明様と申奉ル

一、同十二庚申年　免弐つ三分弐厘

正月廿九日、上使松平伊豆守殿・戸田采正殿、中将様御事、